

＊＊ 私たちの住む金田村の記憶 ＊＊

(2022. 7)

個人の生活 (その7) <寺田縄 Y、入野 Ek、Ey、Yさん>
入野 自治会館で四名の方々にお伺いしました。

水争い

金田、旭地区にとっては、水田の用水を確保することが、死活問題であった。当時、金目川上流に当たる金目地区に水を流すことを頼んでも、金目地区の取水が終わってから流されるのだが、なかなか良しとは言ってくれない。毎年のもので、金目は上流のため強いので、了解を得るのに苦労した。

昭和33年ごろか、旭地区と組んで力づくでの行動に移った。(水争い)青年会の会長が半鐘を叩き、人を集め飯島堰上流の取水口に設置された「蛇籠」を壊して歩いた。警察も出ていたが、混乱が起これば行動する体制が出来ていた。

緊迫場面もあったが、今では飯島堰が完成し、金旭中学校の創立も見て、水争いは昔のこととなった。

神社の祭り

金田辺りは、今と違って行事も少なく、若い人たちの楽しみは、お祭りぐらいで、それはなかなか盛大だった。

祭りの時には、遠くに住まう親戚の者も5、6人、泊りがけで祭りの芝居を見に来る。家では、お客の接待をし、ごろ寝で夜遅くまで祭りの話や世間話にふけた。来客の土産は、当時、貴重品の「砂糖」が中心だった。床の間にその砂糖を積み上げていた家もある。砂糖以外では、「前掛け」を持ってきたこともある。お酒は、地元の店で購入し土産物としては使われなかったようだ。

各家での祭りの準備は、女性が担当し、「お赤飯、煮しめ、なます」などを用意した。食材は、農家なので出来る限り家で獲れる野菜を使い、今は、お金を出せばなんでも手に入るが、当時は自分達で調達した。子供や親戚と人数が多いので、準備は大変だった。

煮しめの材料は、里芋、にんじん、ごぼう、焼き豆腐、ちくわ、昆布などだった。今とは違い、主食として、このような物を食べていたほうが身体は丈夫だった。

神楽や芝居を見たいので、夜ご飯を早く食べてお宮に集まった。神に奉げる神楽、芝居は「せんだいはぎ」「太閤記十段目」などであった。役者・芸人は、中原、柳町などから泊りがけで来た。寝泊りのための夜具、食事(おに

ぎり、煮しめなど）は係りの者が家々を回り集めた。

地元以外の祭り見物にも出かけた。たとえば、真田の天王さん、大磯の高麗寺山などに出かけ、小遣いは十銭～十五銭、それで桃、金魚、氷水を買って食べるのが楽しみだった。

入野では、各家がお宮さんに「お赤飯、煮しめ」をお供えした。お宮での残り物は、集めて豚を飼っていた農家に持っていった。

祭りには、必ず名物人の「河内のタケチャン」がやって来て、芸人でもないのに、芝居の幕引きをやっていた。どこかピント外れの所もあった人だが、幕引きは的を得ていた。話によると、日を間違えることなく各地の祭りに顔を出していたようだ。

入野の祭りは、村の委託を受けた青年会が仕切った。会のべいべいは神楽殿に寝泊りした役者の風呂炊きをした。祭りを運営していた青年会の役員は、威厳に満ち怖かった。「青年堂」があり、各種の会合に使ったが、座席は、役員が上席に陣取り、あとは年齢順に座る。序列がはっきりしていた。新米は掃除や近くのお店「もくさん」に酒タバコの買い出しに走り回った。

商店、行商など

魚は寺田縄、入野ともに大磯から行商に来ていた。寺田縄では、「とらちゃん」という行商が朝4時ごろ売りにきていた。刺身におろしてもらい、朝、食べた。そのため刺身は朝食食べる物と思っていた。塩辛い鱒を食べた記憶がある。

豆腐は買いに行った。入野にはお店があったが、寺田縄は豊田まで買いに行った。今とは違い、豆腐の味噌汁は十五夜の晩とかの特別の日しか食べなかった。

豆腐汁の代わりに「ごじる」という、大豆をふやかしてすった物を汁として呑んだ。

酒は、「かんべさん」で買い、地域の配給ものも扱っていた。

雑貨、乾物は、寺田縄では、「きっかわさん」、入野は「しろたさん」で買った。駄菓子屋は、入野の「もくさん」、子供用のお菓子があつ、あんこ玉がおいしかった。入野東町に「チヨハン」という駄菓子屋だか飴屋があつた。5厘で自家製飴玉を二つ買えた。長持には「たじゅうさん」という店があつた。

自給自足の生活で、家の北側に味噌倉があり、味噌も醤油も自家製だった。醤油の匂

いは、集落のあちこちからしていた。

農 作 業

入野の畑は、中原の中学校付近から渋田川の合流地点ぐらい迄にあり、砂地で大根、甘藷、麦がよく出来た。

畑だったからか、入野の甘藷は美味しく、寺田縄のは甘いけど水分が多かった。

麦は11月ごろに蒔き、30cmほど伸びた時、畝の間に甘藷を植える。麦刈りを終えて、畝の土を甘藷に寄せる。二毛作で栽培していた。

水稻の苗場は農家個人で作り、話し合いとか呼びかけで作ることはなかった。場所は水を引けることができる所、入野では金目川の土手の下にもあった。

麦、米の脱穀は「ガーコン」（足踏みの脱穀機）を使った。子供心に面白い機械で、踏ませてもらったこともあった。「ガーコン」は二人で操作し、早朝から取り掛かって一日に1反出来れば良い方だった。

畑でポンポンと音の出る、舟の焼玉エンジンを使う農家もあり、戦争直後には電気モーターの使用が始まり、電動化が始まった。

収穫した稲は、次の麦のために田を空け、田の畔（くろ）で乾燥させた。粃は家に持ち帰り、むしろの上で乾燥させる。外作業だから雨が天敵だった。乾燥の期間は三、四日。正月までには終わらせる。

粃摺りは唐臼（からうす）を使い、唐箕（とうみ）でもみの選別をし、粃摺りだけの半自動とか全自動を使う農家もあった。

十二月初めになると、「ノアガリ」という二、三日の農事の休みがあった。日にちは、部落総代が頃を見計らって決めていたようだ。決定すると部落内に触れが言い継ぎで知らされた。この時、若い嫁は実家に帰ることが出来た。

小学校には、報国農場があり土曜日に作業をし、農繁期には学校が半日になった。

関東地震（大正12年9月1日）

金田はひどかったようだ。お昼を食べた人がいたが、食べなかった人は、わら屋根の天井から落ちた「すす」の入った食事を持って、近くの藪の中に逃げ込んで食べた。

大揺れの後は、余震が怖かった。家はなく、外で蚊を避けるために蚊帳を張って、近所の人たちと避難していた。

余震の揺れは、船に乗っているように地面が揺れ、一晩中眠れなかった。当時養蚕が盛んだったので、外で寝るのに、桑の枝を敷きその上にわら、蚊帳を張ってしのいだと聞いている。そのため、今でも、いざの時には、と、蚊帳を捨てられないでいる。

養蚕のため二階に保温用の練炭があったが、高窓からの消火で火災にはならなかった。金田では火災はなかったと聞いている。

大揺れの後、ほとんどの大きな藁屋根が潰れ、あたりの見通しが良くなったことを記憶している。

地震の道があると言われ、サイトウミート近くで昼寝をしていた人が、地震に気付かずにいたと聞いている。そこに地震の道があったようだ。

地割れが出来、豚と一緒に転げ落ちた人が、次の揺れで出てこられた。とも聞いている。

朝鮮人が暴動を起こす、甘粕大尉とかの流言飛語も流れていた。東京だけでなく金田でも同じで、十三歳以上の女の子は隠れなければいけないとも言われ、地震より騒ぎが大きくなった。地震後、鈴川の改修に朝鮮からの人足が結構来ていたという話は聞いている。

余震が続き、遊びに行っても、一揺れすると、立ち木にかじり付いた。それは恐ろしかったし、揺れが長く続くように思えた。

鈴川の土手は崩れ落ち、川幅が狭くなった。川の流れは結構変わり、古川も変わったようだ。

大正13年1月15日、再度大きな地震があり、前回のとき仮小屋に住んでいた人も今回の地震でそれも潰され、寒い冬だったのでとても恐ろしかった。

9月1日になると、家では「おじやにねぎ」、「麦ご飯」などの特別食を食べた。地震のときに食べる物がなく辛かった生活に思いをはせ、贅沢をしないなどの戒めを意味した計らいだったようで、戦争中も行ってた。

とにかく余震が恐ろしく厭で、何年も続いた。いまでも、救急袋を用意している。

養 蚕 等

桑畑が広がり、中原が見えないくらいで、畑という畑は全部桑畑だった。金田では大体の家が養蚕をやっていたと思う。戦時中の食料難の時、桑畑に食べる物を栽培した。当時、10円札は養蚕をやっていないと見られなかった。

養蚕農家は身体のすきがないくらい働き、毎晩12時ごろまで蚕の面倒を見るので大変だった。とにかく、農家は働いても、働いても貧しかった。農家が作るものは半年たないとお金が入らないので、現金収入がなく、日ごろの生活は粗末だった。

味噌、醤油は自給自足だった。農家北側の日の当たらない寒い所に味噌部屋があり、一年寝かすと味がとても良くなった。

蚕は中二階で育て、桑の葉を食べる「わさわさ、おそおそ」という音が、子供心にうるさく聞こえた。

桑の葉は竹かごで背負い運搬した。蚕が幼い時には桑の葉を中国包丁のような大きな包丁で切り、大きくなると枝ごと与えたりしていた。

竹籠は、「しんぐるま」（中原にある水車）付近で作られていた。

戦 争 中

戦争中の思い出は、言い尽くせないほどある。当時、ちゃんとした身体の人には戦地に赴き、残されたのは女、年寄り、子供だった。そういう中で、家が焼かれ、その苦しみは、今でも忘れられない。

平塚大空襲の時、秦野街道から当時の小学校までの道の両側が、焼夷弾爆撃の対象になり、残った家もあるが、多くが被害を受けた。

小学校には海軍省の軍需品（モーターとも言われている）があったからか、爆撃は小学校付近で終わっている。（入野に接する寺田縄の一部も含まれる）

ある牛小屋に、結束されたままの不発の焼夷弾が落ち、胴体を貫通した牛の死骸を馬捨て場に運んだ。

不発の焼夷弾が最近まであったが、本体は劣化しぼろぼろとなり、金属部分は残った。

入野の被害がすごく、子供が死ぬか、自分が死ぬかの本当に辛い思いで過した。

防空壕は雨が降り、水が入り、蚊も多く沸く状態だった。

古川排水路の昭栄橋たもとに掘られた防空壕には、むしろを水に浸し中に入った。遠くの人達も入ったりした。

平塚大空襲の夜は、近くの人家でそばを呼ばれていた。警報が鳴って帰宅後火の手が上がった。

平塚大空襲の夜は街に外出後、ひとねりしてからだったので、爆撃は余り遅くではなかったと思う。それは、7月15日（正しくは16日夜半）だったと記憶している。

家から見えた小学校は、窓から火を噴き、それは綺麗だった。怖さを覚えずとにかく綺麗だった。と思い出される。

東京でも空襲に合い、平塚に来てからも空襲に合った。焼夷弾がバラバラ落ちてくるのを「いろいろじ橋」から見た。照明弾が落とされ、あたりが明るくなるとB29からの爆撃があり、生きた心地がしなかった。

今の時代は、天国みたい。くる日もくる日も、はだして畑作業を続け、田んぼにも焼夷弾が落ち、家の玄関にも落ちた。あの怖い気持ちは忘れられない。

小さな藪には近所の人達も逃げ込み、高射砲からの破片が、カチャン、カチャンと音を立てて落ちてくる。

子供だったので、桜の咲く、「こうのまち」頃に飛行機を見た。攻撃を受けるなど思わず、手を振ったりしたが、よく撃たれなかったと、思い出される。

艦載機（グラマン）がよく飛来し、低空からの射撃を受けた。

終戦近くにも大きな空襲があった。

空襲警報が鳴ればすぐに爆弾が落下し、夜、着たままで寝た。あんな哀れなことはなかった。

朝ごはんを炊くにも火が使えない。炭で火をおこし鍋でご飯を炊き、隠れながらご飯を食べる。敵機から目標になる物は全部だめ、しょっちゅう偵察機が飛んでくる。洗濯物も干せず、空襲になると直ぐしまいこむ、を繰り返す毎日だった。

金田に川崎の日吉小学校から疎開児童がきていた。農家に寝泊りし、入浴させていた。家では4人の児童を入浴させていた。慣れないところに来ていたので、夜は寂しそうだったし、泣いてばかりいた。

空襲が激しさを増し、町内で皆が寄って、「お米の有るだけを荷車に付け、大山の方へ逃げよう」という話があったが、事を村長が聞きつけ、集められた皆の前で「十俵の米を持って行って、どこまで逃げても艦砲射撃でやられる事もある。逃げても十俵の命で終わってしまう事になるかも知れない。島（沖縄か？）の人達は死ぬまで戦ったのだから、ここの人達はそんなことをしてはいけない。山の方に逃げても逃げ切れないので、ここで死ぬつもりで、自分の土地は自分で守れ」というような話があった。

その事をお姑に相談したところ「自分の家を守れないかもしれないけれど、艦砲射撃の弾は、ここを通り過ぎて大山に飛んでいってしまうかもしれない。行く先で死んでしまうかもしれない。私はここに居座る」と言ったので、お婆ちゃんはたいした人だ、との思いを強くした。

家は焼かれ、リヤカーに布団を積み、あちこちに逃げた。今では、自分の姿が衰れにも思うけれど、いろいろな苦しみを我慢して子供たちを育てなければならぬと決心している。

平塚大空襲後も逃げることを最優先で、家は開けっ放し、まんじりともしない日々を過ごした。いろいろな事を経過して、気が強くなった。

戦後の学校

小学校は消失したので、7月20日から分散授業になった。初一は入野神社、二は福田寺、三は熊野神社、四は入野神楽殿、五は吉祥院、六は日枝神社、飯島は？

入野神社はトイレがなく、男子は良いが女子が不自由したと思う。

日枝神社の釣鐘のない（戦時供出）堂で遊んだ。

学校で桑の葉をはがし、乾燥させてわら半紙と交換する作業をした記憶がある。

金目川の土手に作られた「報国農場」は戦時中から続けて、甘藷、小麦を栽培していた。

学校の裏手に井戸、溝があり、田んぼに繋がっていた。

校庭は狭く100メートルしか取れず、火薬廠であった地区対抗のリレー競技には、他校が200メートルで練習してきていたので、なかなか勝てなかった。

食糧増産のための溝稲は高等科が担当していた。

地域情報

公民館の裏手だったか「やみだ」と言われる田があり、毎年神主のお祓いを受けてから、耕作した。

今の小学校の西側の道路だったか、校庭になっている辺り（入野「塔の越」）に、大きな桜の植わった塚があった。学校建設の時に、その塚を掘っても何も出なかったようだ。一説には、北条と武田軍の合戦による死者を弔ったとも聞いている。

15分団庁舎辺りに「ごあんさん、ごあん橋」があり、小さな塚にはお宮さんのような建物があつた。像は、少林寺に安置されているようだ。

屋根つきの地蔵尊（立像）が今の犬の医院辺りにあつた。像は頭部がなかったと思う。

昭和30年に天皇皇后の行幸・行啓時、川口金属から小学校までの道に小砂利を敷き詰め、消防分団もお迎えし、その時の記念バッジを今でも持っている。

小学校に設置された拡声機からラジオ体操を流し、一時、野良仕事を休み健康維持を図つた。

地域住民の健康維持やバレーボールの普及は、地元の活動家（村長、石川さん、校長）と無医村に着任した診療所の吉田先生の功績が大きい。

戦後は地域として、社会教育が盛んで国、県から表彰された。

小学校地に建設された「健民館」は、学校の講堂であり、地域の体育施設でもあつた。

< 以上 >